

しろ  
 白い  
 すずめ  
 雀

おおかわすじ  
 大川筋の左岸のとある村に一人の百姓がいた。農業だけでは暮らしが立たないので、大川で川魚を取ったり川石を採ったりして生活の資にしていたので、誰いともなく石鰻(いしかじか)の<sup>しやくめい</sup>綽名をつけられた。

ある日例のように本郷川原<sup>ほんごうかわら</sup>に出て漁をしようと思つて、中洲<sup>なかす</sup>を歩いていたら、白い小鳥がチチツと鳴きながら飛んでいる。見ればどうも雀<sup>すずめ</sup>らしい。珍しいこともあるもんだと思つて、捕えたくなり、手にしていた網<sup>あみ</sup>を投げかけると、うまく引つかかつた。あの男は大切にはけごに入れて手拭<sup>てふき</sup>で蓋<sup>かひ</sup>をして家に持ち帰つた。

「おつかあー今けえつた。これを見ろ。これ売るんで鳥籠<sup>とりかご</sup>も出してくろ」  
 彼はそう叫んだ。妻女は鳥籠<sup>とりかご</sup>を持って出て来た。

「おとうーこりや雀<sup>すずめ</sup>じゃねえだかよ 白い雀<sup>すずめ</sup>だ どこで捕つた。」